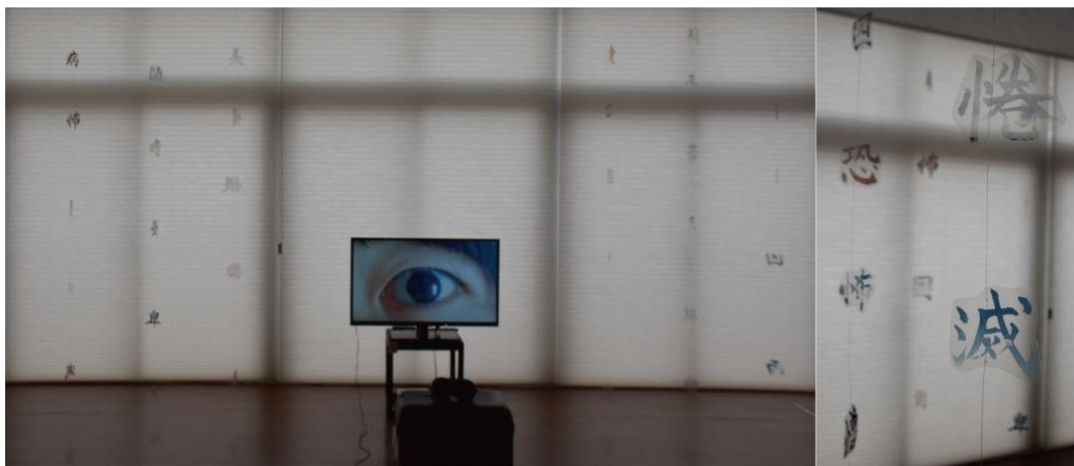


祓川 彩

HARAIKAWA Aya



感情と、幕間と... 返信待ちと...

映像:3分35秒 インスタレーション:写真、ラミネートフィルム、テグス

感情と、幕間と... 返信待ちと...

「言葉にならない感情になったことがあるか。」

高校2年生の時に観劇した舞台作品『滝沢歌舞伎』が私の研究の原点だ。込み上げる震えと共に舞台に吸い込まれるように作品に魅了され、「感情」が揺れ動き止まることをしなかった。そして、あれから約7年、そして修士研究から2年、私が辿り着いたところは、滝沢歌舞伎の舞台の一場面「題名のない演目」だった。

華やかで煌びやかな舞台演目から一変、

愛・絆・美・暗・凶・苦・亡・憎・恨・怖・破・病・倦・因・倒・老・闇・滅・失・辛・
丙・怪・溺・狂・悲・哀・卑・負・災・怨・恐

これらの文字の登場・表現によって劇場の空気は大きく変化し、観客に衝撃を与える。しかしこの場面はパンフレットやDVDにも演目として表記されることはない。それはまるで「幕間」のようだ。この場面でパフォーマンスをするのは常に「脇役」だ。もちろん、人気も知名度もある出演者ではあるが、それは光の当たらない場面であり視線の集まらない主役の一步後ろにいる存在だ。しかし彼らがいるからこそ、幕が閉じることなく、一度も暗転することがなく舞台が進行し続けることができるのである。まさに“show must go on”だ。

そしてその状況はまるで、自分のようでもあった。6年間美術大学にいた私は、作品制作よりもアーティストの作品に言葉をあてる機会が圧倒的に多くあった。それは作品という表立つモノではなく、作品をより引き立たせるための後ろにいる存在だ。しかし、その人たちがいない芸術は、時として成り立つことができない必要な存在でもある。

それは修士課程からアートプロデュース研究領域で学ぶ私にとって、一步後ろからみることの大切さを知っていることの強み、表立つ作品制作をすることへの経験の少なさという弱み、その両方がこの「題名のない演目」と自身と照らし合わせ、そして自身の感情と共に表現する最大の材料となった。

そして、以下の3つをテーマとして表現を試みた。

自然というなかで途切れることなく、毎分毎秒と変わり続ける「空」

我々人間に平等に存在する、終わりの見えない常に変わり続ける「感情」

途切れることのない「エンターテインメント」

伝統の継承の中で終わりを迎えた「滝沢歌舞伎」の演目を繋ぐ題名のない演目に、感情と共に筆をのせ、自身の最大の表現方法「空」「書道」を照らし合わせながら全ての「きっかけ：原点」を私の最後の舞台とした。

彼が語っていた「ステージから皆様に“何か、が伝われば。”

今度は私が、私の作品を通して鑑賞者に「何か」が伝わること、そしてそれが次の「誰か」のきっかけになることを願っている。

そして彼から、返信があることを願いながら今日も過ごしている。